

『今月の天候と農作業』

通巻第5705号
11月号
令和7年10月30日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

特になし。

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

低気圧や前線の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	40	40	20

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。平均気温は、高い確率60%、です。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 11月1日(土)～ 11月7日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

<2 週目の予報> 11月8(土)～ 11月14日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 11月15日(土)～ 11月28日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆大豆

収穫と乾燥

収穫時に大豆の青立ち株や雑草が混ざると茎汁による汚損粒やカメムシ類による被害粒の原因となるため、事前に抜き取りを実施しましょう。

成熟期は、完全に落葉し、莢がカラカラと音がする頃です。コンバインでの収穫適期は、さらに10日程過ぎて、枝がポキポキ折れる時が目安で、茎水分の高い早朝の収穫は避けましょう。

乾燥は、高温ではしわや皮切れを起こすため設定温度を30℃以下にします。

◆ソバ

収穫と乾燥

バインダーや手刈りでの収穫は、子実の7～8割が黒変した頃の朝夕に行い、10日程島立てし、子実が粉状になるまで乾燥しましょう。

コンバインでの収穫は、8～9割が黒変した頃に行い、30℃以下を目安に乾燥し、その後は風選し、粒選別機などで夾雑物を除きましょう。

◆麦類

1 ほ場の準備

排水良好なほ場を選び、碎土を丁寧に行いましょう。麦は酸性土壌に弱いため、石灰質資材で酸度を調整します。堆肥は10aあたり1t程度で、基肥は地区基準を参考に施用しましょう。

2 種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病対策として種子消毒を行いましょう。播種は、山間部では11月中旬、沿海部では同下旬から12月初旬に行います。ほ場の周囲や3～5m間隔に溝を掘るなどし、湿害対策を徹底しましょう。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆施設野菜全般

11月末までは寒暖の差が大きいため、夕方早くに内張ビニルを閉め保温すると、ハウス内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。このため最低気温を確認しながら、加温機が稼働する程度の温度管理を心掛けましょう。

また、比較的低温で管理する作物では、夜温が下がらない場合には、内張ビニルを閉める時間を遅くするなど、状況に応じた管理を行いましょう。

◆きゅうり

促成きゅうりは、主枝から側枝での収穫期となります。作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草勢を維持しながら、栄養成長と生殖成長のバランスのとれた生育をさせることが大切です。生育や果実の着果状況に応じたかん水、施肥管理を行いましょう。

◆ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量が多くなり、着果負担が増加するため、草勢低下に留意して適期収穫に心掛けましょう。また、草勢維持のために生育や果実の着果状況に応じたかん水、施肥管理を行いながら、収穫が終わった懐枝を順次除去し、通風、採光の改善を図りましょう。

◆トマト

促成栽培は収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水量や追肥量を調整します。また、極端な草勢低下が見られる場合は、摘果により回復を図ります。

◆いちご

日中に施設内の温度が高く追肥の量が多い場合に、チップバーンによるがく枯れが発生しやすくなるため注意しましょう。

また、電照の開始時期となりますので、夕方の日長延長は2・5時間、間欠電照は夕方5時から翌朝6時まで1時間あたり5分間、暗期中断は深夜1時間を目安に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行いましょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆食用かんしょ

収穫・貯蔵作業の時期です。貯蔵条件は、温度１３℃～１５℃、湿度９０％を目標にします。また、貯蔵中にいもが腐敗する場合があるため、空調設備を積極的に利用すると共に、腐敗した芋は取り除きましょう。

翌年に使用する種いもは、病害が発生していないほ場から採取します。

◆さといも

翌年に使用する種いもは、病虫害の被害が無く、いもの形状が良い、優良な株から選びます。いもを貯蔵する場合は、親いもから子いも・孫いもが離れないようにします。また、収穫せずにはほ場で貯蔵する場合は、低温障害を受ける恐れがあるので、マルチを除去し、培土をしましょう。

◆収穫後の片付け（かんしょ、さといも）

病害の蔓延を防止するため、収穫や種いもの採取が終わったら、ほ場の片付けを行います。残渣は、できるだけほ場外に持ち出し、残った残渣は、耕耘等により分解を促します。また、病害の発生源になるため、ほ場や畦畔等に残渣を放棄しないようにします。病害が発生していないほ場や種いも採取ほ場に入る時は、病虫害の伝染を防ぐため、使用する長靴や農機具を洗浄してから入りましょう。

◆ほうれんそう

加工・業務用に使用する露地栽培では、病虫害対策としてべと病やアブラムシ類の防除を行いましょう。

◆たまねぎ

定植時期です。定植の深さは２～３cm程度とします。また、定植後１週間程度は、かん水し活着を促しましょう。

（倉永 泰代）

果樹

Ⅰ 常緑果樹

◆かんきつ全般

秋肥を施用する時期です。この時期の施肥が、翌年の花芽充実に有効とされています。秋肥の効果を十分に高めるためには、樹体に肥料が吸収される12℃以上の地温が必要です。これから気温や地温が低下する時期となるため、11月中旬までに施肥を行いましょう。

◆日向夏の落果防止

日向夏は土壌の乾燥や施肥不足等により、秋から冬の落果が助長されます。落果防止剤を11、12月に散布しましょう。

◆完熟きんかん

今年は1、2番果の秋期の落果により、3番果以降の果実が結果の中心となっている園が散見されます。既に果実の肥大が十分な園では、着色に向けて昼間の温度が高くなりすぎないように管理し、肥大が不足している園では、秋季加温を継続しましょう（昼間の温度は28℃、夜間は外気温のプラス3℃程度を目安とします）。

◆マンゴー

早期出荷の作型では花芽分化に向けた管理として、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度に抑え、夜間の最低温度を6～8℃程度に維持します。

十分な低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。5割程度の出蕾を確認したら、ハウスの夜温を15℃に向けて徐々に昇温します。急速に温度を上げて花芽を生長させると、花粉や子房の形成不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を助長します。日中の急激な温度上昇を避けるなどの温度管理を実践し、ゆっくり花芽を生長させましょう。

2 果樹園共通

冬期には防風林や防風ネットの整備を行います。防風林は、あまり密植状態にせず、適度に風が通るように枝を整理します。防風ネットは、傷んでいる部分をしっかりと補修しましょう。

（黒木 宏憲）

花き

◆キク

気温の低下に伴い植物体が結露しやすくなり、白さび病の発生リスクが高まります。曇雨天時は送風などを行い、結露防止に努めましょう。

年末出荷作型は摘蕾期です。花のボリュームを出すために、摘蕾作業は適期に行いましょう。

◆スイートピー

採花の開始時期です。

樹勢を安定させ着花を促すため、徐々にかん水を控えましょう。

また、曇雨天後に晴天が予想される場合は、成長点や葉の焼けを防止するため、カルシウム剤の葉面散布などの対策とあわせ、必要に応じて遮光を行いましょう。

夜間の加温が必要な時期となるため、早めにダクトを設置し、微生物農薬のダクト散布（農薬登録のあるもの）を開始しましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム剤を葉面散布して茎の硬化を促すとともに、収穫後に適切な前処理を行い花落ちを防止しましょう。

また、2番花のロゼットを回避するため、1番花の花穂伸長終了時から電照を開始しましょう。

◆トルコギキョウ

過剰施肥や曇雨天はブラスチングの発生要因となるため、生育状況に応じ追肥を発蕾前に終わるようにしましょう。

一方、10月定植作型では葉先枯れ症状が発生しやすい時期となります。徐々にかん水を控えて根域を広げるとともに、適宜カルシウム剤を施用しましょう。

◆ラナンキュラス

気温及び地温が低下してきます。徐々にかん水間隔を広げて根の伸長を促します。

夜間の加温が必要になるため、早めにダクトを設置し、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を開始しましょう。

（山塚 裕美）

畜産

◆家畜防疫対策

鶏では１０月２２日に北海道で今期１例目となる家きん飼養農場での鳥インフルエンザの発生が確認されました。

野鳥においては、宮崎県を含む全国各地で感染した個体が確認されています。

また、豚熱（ＣＳＦ）に感染した野生イノシシは宮崎県内で２０例確認されており、養豚場へのウイルスの侵入リスクが高い状況が続いています。

これらの法定伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒及び、野生動物の侵入防止対策を再点検し、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

また、日頃から健康観察をしっかりと行い、異常が見られた場合には、速やかに家畜保健衛生所に通報しましょう。

◆家畜

今月は朝晩の冷え込みが厳しい時期に入りますので、こまめにカーテンを開閉するなど、畜舎内の温湿度環境に注意しましょう。

また、本格的な冬を迎える前に、幼畜用の保温箱や風よけ等の保温機材を点検整備するなど寒冷対策の準備を行いましょう。

牛では、飼料作物の収穫と作付けなど農繁期となるため、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されます。朝夕の観察を徹底しましょう。

◆飼料作物

飼料用稲、トウモロコシ(二期作・遅まき)、ソルゴーなどの収穫時期と、イタリアン、エン麦などの作付け時期が重なる時期です。飼養管理に影響が出ないよう計画的に作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

1 寒害・凍害防止対策

近年は暖冬傾向で茶樹の耐寒性の獲得が遅れる傾向にあります。耐寒性の弱い早生品種（さえみどり等）や中切りしたやぶきた等では、秋冬期の急激な低温により茶芽が凍害を受け、芽つぶれを起こす場合があるため、防霜ファンやスプリンクラーを用いた秋冬期の防霜対策を検討しましょう。

また、幼木園での敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなるため、敷草はできるだけうね間中央に寄せるようにします。万一、幹割れが発生した際は、速やかに株元へ土寄せを行いましょう。

2 害虫の防除

一番茶前のカンザワハダニの密度増加を抑えるためには、越冬前の整枝・裾刈り後に行う防除が重要です。専用ノズルを用いて、飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への薬剤の付着状況を確認しながら丁寧に散布しましょう。

また、チャトゲコナジラミの発生が多くみられる茶園では、マシン油乳剤によるカンザワハダニとの同時防除を行いましょう。

（新 正仙）

◆しいたけ

1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで実施します。クヌギやコナラの場合、葉が3～7割程度黄色に色づく11月中旬頃までが、伐採に適しており、樹皮の剥がれにくいほだ木となります。良いほだ木づくりのため、適期伐採を心がけましょう。

また、伐採後は葉枯らし乾燥を伐採から40～60日間程度実施しましょう。

2 発生操作

ほだ起こし作業は、一般的に10月～1月に行いますが、品種によって発生する温度帯が異なるため、品種の特性を十分に理解して作業時期を決めます。また、ほだ起こし後に散水を必要とする品種や、水分供給を遮断して抑制を必要とする品種がありますので、使用品種の特性に合った管理を行いましょう。

ほだ起こし作業の際、長時間直射日光に当てるとほだ木が痛むので、作業は曇天の

日か朝夕の日差しの弱い時期に行うほか、作業時には樹皮を傷つけないよう注意しましょう。

なお、風が強く吹き込むほど場は乾燥によってしいたけの生育不良や変形を引き起こす原因ともなるため、防風ネット等を設けると良いです。

(奥野 慧)

関連情報

◆農作業安全

令和9年1月からトラクタで道路を走行する際には、シートベルトの着用が義務化されます。

農作業死亡事故の原因で最も多いのが乗用型トラクタをはじめとした機械の転落・転倒です。

転落・転倒による死亡事故を防止するために、トラクタでの作業時には、シートベルト着用に加えて、安全フレームを立て、ヘルメットを装着しましょう。

◆肥料に関する届出義務

堆肥を製造し、他者に譲渡する場合、県に特殊肥料生産業者届出書を提出することが「肥料の品質の確保等に関する法律」で義務づけられています。(無償で譲渡する場合も届出が必要です。)

また、製造した堆肥を販売する場合には、肥料販売業務開始届出書の提出も必要です。

堆肥を製造・販売する方は、忘れずに届出を行いましょう。

届出方法等については、県のホームページを御確認ください。

(<https://hinatamafin.pref.miyazaki.lg.jp/soshiki/nogyohukyugijutuka/nouyakuoyobihiryounobunnsekihiryoubunsekiirai/index.html>)

◆農業用廃プラスチックの適正処理

農業用廃プラスチックは産業廃棄物であり、農業経営者の責任によって適正に処理されることが「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」によって義務づけられています。

不法焼却や不法投棄だけでなく、無許可の回収業者を利用した場合にも罰則が課せられます。許可業者のトラックには許可番号の記載がありますので、業者に依頼する場合は、必ず許可番号を確認して利用しましょう。

(農業普及技術課)

内容の詳細について

11月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、農業普及技術課が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	並	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入防止に努めましょう。
	ハスモンヨトウ	並	ハスモンヨトウは老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場を定期的に見回り、早期発見と若齢期の防除に努めましょう。 施設栽培では施設の開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止しましょう。
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病	並 並 並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除しましょう。また、施設内が過湿にならないように換気に努めましょう。
	黄化えそ病(MYSV) けきいアザミヤ	並 並	MYSV の感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封するなど適切に処分しましょう。
	タバコナジラミ	やや多	タバコナジラミの発生が多くなっています。本虫は、キュウリ退緑黄化病を媒介するため、施設内への飛び込みを防止し増殖しないよう防除を行いましょう。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 黒枯病	並 並 並	いずれの病害も多発してからでは防除が困難となるため、早期発見・早期防除に努めましょう。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行いましょう。
	けきいアザミヤ ヒズバアザミヤ タバコナジラミ	並 やや少 並	いずれの害虫も、有色粘着板を設置し、早期発見に努め、低密度のうちの防除を徹底しましょう。また、施設の開口部へのネット設置や施設内外の除草などを徹底しましょう。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病	並 やや多	両病害とも多湿条件下で発生しやすいため、施設内が過湿にならないよう換気に努めましょう。また、多発してからでは防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除しましょう。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) タバコナジラミ	並 やや多	トマト黄化葉巻病は、タバコナジラミによって媒介されるため、有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるため、根ごと抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し適切に処分しましょう。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	並 並	うどんこ病は多発すると防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めましょう。
	ハダニ類 アブラムシ類	やや少 並	いずれの害虫も、寄生数が増加してからの防除は困難なため、低密度時の防除を徹底しましょう。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。
果樹全般	チャバネアカカミシ ツヤアカカミシ	—	県内 5 か所に設置している予察灯の直近 1 か月の誘殺数は、チャバネアカカミシ、ツヤアカカミシともに平年よりやや多くなっています。今後収穫を迎える園地では、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めましょう。特にハウスキンカンでは、今後ハウス内への飛び込みに注意しましょう。
かんきつ類 (露地栽培)	ミカンハダニ	並	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するため、寄生葉率 30% または 1 葉当り虫数 0.5~1 頭を目安に防除しましょう。
茶	カンザワハダニ	少	本県では冬期でもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要です。この時期の防除が不十分だと翌年の一番茶への影響が大きくなります。

1) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) 病害虫防除肥料検査センターの HP アドレスは、QR コードより閲覧してください。

